

Column

## カムバックサーモン サケの母川回帰

過去に金田まで遡上した記録も残っているサケ。例年、子どもたちが願いを込めて彦山川に稚魚を放流しています。サケの卵は約2か月でふ化して稚魚になり、約4ヶ月になると群れで海へ下ります。8～12ヶ月まで沿岸で生活し、初夏に入ると北の海を目指して旅立ちます。サケは北太平洋の冷たくて広い海を回遊しながら動物プランクトンや小魚を食べ、4～5年かけて約60%まで成長。栄養をとって成熟したサケは、やがて産卵のため生れ故郷を目指すのです。これはサケの「母川回帰」として知られています。サケが数千kmの遠い海から故郷をたどる仕組みは諸説ありますが、記憶していた川の水の臭いを頼りにしているともいわれています。

生まれた川に戻ったサケは、エサも食べずにひたすら上流を目指します。長旅でボロボロになりながらも、最後の力を振り絞って産卵し、それを見届けるように一生涯を終えるのです。



↑「戻っておいでね」と声をかけながら赤池中で毎年行うサケの稚魚放流。



松江市でARTを発表する6人、左から松枝志穂さん・名嶋優さん・三浦明さん・杉本治佳さん・立花歩さん・安永佳織さん



環境保護も呼びかける「タガツパ」、2月27日に小学生が描いたポスターを看板にして河川敷に設置しました。



彦山川の源流となる英彦山での水質調査

生まれた川に戻ったサケは、エサも食べずにひたすら上流を目指します。長旅でボロボロになりながらも、最後の力を振り絞って産卵し、それを見届けるように一生涯を終えるのです。

この取り組みは高く評価され「水環境フェア2006 in松江」の発表が6月13日に決定。国交省九州整備局管内から1校という推薦を受け、8月8日に赤池中2年生の6人が、島根県松江市で「ART」を紹介しました。

### 全国の舞台に立つ 赤池中2年の「ART」

赤池中学校2年生の112人は、1年前に自分たちで「総合的な学習の時間」のテーマを「私たちの水源を守ろう」という課題に設定しました。みんなの投票で学習の名前を「ART」と

呼ぶことに決め、水を中心とした環境問題について、1年間学習を重ねました。「ART」は「Aike River Time」の大文字をとったものです。「ART」では、まず始めに彦山川がどれだけ汚れているかを認識するため、河川敷のゴミ拾いをしました。冷蔵庫や浴槽などにもあり、予想をはるかに上回る量と種類に驚いたそうです。



彦山川河川敷で収集したゴミの分別



沢ガニなど水辺の生物に触れながらの観察

福智町は、合併前からすべての学校で環境教育が盛んでした。子どもたちが一方的に知識

とした感じで、下流は「ドロツ」としている」などの感想を交え、成果を詳細にまとめた「ART新聞」を作成。3月に行われた「いけいけチャレンジ遠賀川」で発表し、遠賀川河川事務所長から表彰されました。

川を守るためには、日常の行動が大切。行動へつなぐためには、そこに意識が必要で、大人の意識が変わり、子どもたちの意識を作っていくことが求められています。川を守ることが、あらゆる環境問題の解決につながるという理由は、この「意識づくり」にあります。福智町は、合併前からすべての学校で環境教育が盛んでした。子どもたちが一方的に知識

### めだかとカッパで活用 金田の「水辺の楽校」

福智町河川公園のコミュニティゾーン内に、国が整備した「水辺の楽校」（金田小裏）があります。この環境を活用するため、6人の会員で組織された「めだかの楽校」(矢野義隆校長)は、「田川ふるさと川づくり交流会」(大久保琢磨会長)との連携で「タガツパ学校inかなだ」を



彦山川で初めてのカヌーに挑戦

# 川に学ぶ

Hikosangawa

川の楽しさ、川が持つ力を感じ、川への理解を深める体験活動。町づくりも川づくりも人づくりから始まります。

### 子どもの水辺事業計画

現在、国交省による市場小横の河川敷を活用した「子どもの水辺」事業が計画され、協議会が発足しています。行政・学校・社会教育関係団体・夢の会など13人で構成され、7月末に視察を予定。子どもたちが日常生活でより身近に川を感じられるような立案が進められています。



6月9日に開かれた協議会